

指導マニュアル 4: 移動する境界線と市民権

～「自画像」を内側から問い直し、制度の境界を疑う～

1. 指導の核心(コンセプト)

「日本人」という枠組みが、戸籍や国籍という「制度」によっていかに排他的に作られてきたかを理解させます。自分たちを「均質な集団」と見る「自画像」を相対化し、内なる多様性を発見させます。

2. 重点指導ポイント

A. 戸籍という装置

- 解説の急所: 日本では戸籍が「国民」の証明であり、それがいない人を「外国人」として排除してきた歴史(国籍条項など)を教えます。制度が意識を作っている点を指摘させます。

B. 自画像と他者

- 解説の急所: 他者(外国人、引揚者など)との関わりの中でしか、自分自身の姿は見えない(自画像は描けない)という筆者の比喻を深く理解させます。

3. 生徒を伸ばす問いかけ

- 「もし明日、戸籍制度が廃止されたら、君の『日本人』としてのアイデンティティはどう変わる？」
- 「日本に住む外国人は、日本の『自画像』のどこに描かれているべきだと思う？」

4. 添削の際の NG ワード・NG 論理

- ✕「日本は単一民族だから共生は難しい」→ 歴史的事実(移動の歴史)の無視。
- ✕「外国人の人権を守るために優しくすべきだ」→ 「自画像」という論点を外している(同情論)。
- ○「制度的境界によって形成された排他的な自画像をいかに再構築するか」という論理を推奨。